

認知症の精神症状の発症・予後予測法の開発と薬理学的基盤の解明

西尾慶之

東北大学医学系研究科 高次機能障害学

【研究の背景】

BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia) は患者および介護者の負担を増大させる症状の主要なものである。BPSD の評価は主として介護者に対する質問票が広く用いられているが、十分な客観性と定量性を有していない。

【目 的】

レビー小体型認知症 (Dementia with Lewy bodies, DLB) の主たる BPSD である幻視を客観的・定量的に評価する手法として「パレイドリア・テスト」を新たに開発し、その妥当性の評価、他の認知症疾患との鑑別における有用性を検討することを本研究の目的とした。

【方 法】

パレイドリア・テストは、風景写真の叙述テスト、ノイズに埋め込まれた顔を同定するテストの2つのセクションから成る。それぞれのテストにおいて誤って刺激中ではない対象を同定した場合をパレイドリア反応とみなし、その総数をパレイドリア・スコアとして算出した。パレイドリア・テストの併存妥当性の外的指標として Neuropsychiatric Inventory (NPI) の幻覚スコアを用いた。DLB 患者40名、アルツハイマー病 (Alzheimer's disease, AD) 患者42名、健常高齢者20名を対象にパレイドリア・テストを施行した。DLB 10名、AD 10名に対しては異なる検査者が2回テストを行い、テスト・再テストおよび検査者間妥当性を intraclass correlation (ICC) を用いて検討した。

【結 果】

パレイドリア・テストの施行に要する時間は 16.8 ± 4.0 分であった。DLB 患者は、AD 患者、健常高齢者に比して有意に高いパレイドリア・スコアを示した (DLB 10.2 ± 2.0 、AD 2.7 ± 3.4 、健常高齢者 0.3 ± 0.6)。パレイドリア・スコアのカットオフを 4/5 に設定すると、DLB と AD の鑑別能は感度81%、特異度91%であった。パレイドリア・スコアの ICC は 0.82 で、高いテスト・再テスト/検査者間信頼性を有していることがわかった。パレイドリア・スコアと NPI 幻覚スコアの相関係数は 0.63 で中等度の併存妥当性を有していることがわかった。

【考 察】

パレイドリア・テストは臨床現場での使用に耐えうる簡便性と妥当性を有する幻視の代用指標である。また DLB と AD の鑑別においても高い有用性を持っている。今後はパレイドリア・テストの治療効果の判定や予後予測における重要性を明らかにするために、縦断研究を行う必要がある。

【臨床的意義・臨床への貢献度】

簡便性、客観性、定量性を有する BPSD の指標を開発した点に本研究の臨床的意義がある。今後はウェブサイトを通じて希望者にパレイドリア・テストを無料で提供し、臨床現場で活用してもらう予定である。

【参考・引用文献】

渡部宏幸, 西尾慶之, 森悦朗. レビー小体型認知症の BPSD とその対応. 老年精神医学雑誌 26:1229-1233, 2015.